

中学校を中心としての道徳授業の充実をめざして

秋池 功（八洲学園高等学校非常勤講師）

1 はじめに

平成30年度から小学校で特別な教科「道徳」すなわち教科となった道徳が本格実施された。31年度は、中学校がスタートする。教科化によって多くの学校は、児童生徒、保護者に対して通知表に道徳も評価を記すことになった。

今回の道徳科設置における経緯は、○歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること。○他教科に比べて軽んじていること。○読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があること。○いじめの問題への対応すなわちいじめの問題に対しての子供たちの心の一層の変容といじめを許さない態度の育成や生命の尊重等の一層の充実を図ることも求められている。（中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説「特別の教科道徳編」より）

教科化になってもう道徳の時間をやらずにまたは、軽はずみに行って過ごすことはできないであろう。また、評価することによって、記述式でもそれなりに子供たちの変容を把握していかなければならない。また、今回の改訂では、今まで以上に「考え、議論する道徳」が求められている。教師は、子供たちとともに道徳の授業の教材研究にも励み、授業の楽しさを評価とともに研究していくことが求められる。

このようなことから、私なりに教諭、校長時代〈示範授業等〉に道徳の授業に携わってきたことと、平成27年度から29年度の3年間某私立大学で学生たちに道徳教育の研究や指導法について指導してきたことを踏まえ、望ましい授業を目指す一コマについてまとめてみることにした。

2 文部科学省が行った調査結果を踏まえて

平成24年5月～6月に文部科学省が全国の小中学校を対象に「道徳教育実施状況調査」を行った。その中の主な調査結果を踏まえ道徳授業の充実、推進に向けていく必要がある。

（授業に参考となる主な調査結果）

ア 道徳の時間の指導でどのような教材を使用したか？

心のノート（小中合計88.8%）民間の教材会社で開発、刊行した読み物資料（一般的には、副読本）（小中合計84.7%）都道府県や市町村教育委員会において開発した読み物資料（小中合計60.0%）書籍、雑誌、随筆、評論、小説、詩、伝記等の資料（小中合計57.9%）新聞記事（小中合計56.7%）

*少ないものでは、動画コンテンツ等の視聴覚教材（小中合計36.3%）

イ 道徳の時間についてどんな指導方法を研究したか？

読み物資料の利用（小中合計69.4%）発問の工夫（小中合計68.3%）話し合いの工夫（小中合計61.3%）書く活動の工夫、板書を生かす工夫（共に小中合計42.3%）

* 説話の工夫，動作化，役割演技 パソコン等の動画関係まだ低い状態である。

ウ 道德教育を実施する上での課題としてどのようなことが考えられるか？

指導の効果を把握することが困難である。(小中合計48.8%) 効果的な指導方法がわからない。(小中合計35.2%) 適切な教材の入手が難しい。(小中合計31.3%)

以上，道德の授業を行う上で常に課題となって研究していかなければならない3つの調査結果を取り上げてみた。

アの設定問の授業に使う教材として「私たちの道德」と「読み物資料」は，学校としても今後も多く活用されていく。特に読み物資料は，教科書となったから不可欠なものである。また，「私たちの道德」は，教材とともに子供たちに書かせるうえでも手っ取り早いのでやはり，今後も大いに活用されていくであろう。教科書と心のノートだけだと授業のマンネリを招く。このようなことから動画(DVD)や役割演技，また，子供たちの実態にあった新聞資料等も適宜取り入れ興味関心を図っていく必要がある。

イの設定問の道德の時間の指導方法の研究では，いままでと少し重点の置き方を変えていくべきである。「考え議論する道德」が問われていることから「話し合いの工夫」をどのようにして，より高めていくかということの研究をより進めていくべきである。紙面の関係で，次にウの設定問の道德教育を実施する上での課題として，「指導の効果を把握することが困難である。」の評価について今後より一層学校教育の中で研究されていかなければならない。

3 道德科の目標実現のために

道德科の目標では，「よりよく生きるための基盤となる道德性を養う——人間としての生き方についての考えを深める学習を通して，道德的判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。」(学習指導要領解説道德編より)

道德科の目標に少しでも到達することが，教師に求められたものである。そのためには，道德の時間を通して，道德的判断力や心情，実践意欲，態度が育つ授業の在り方を研究実践していく必要がある。

道德の授業について，私は，古代学者のアリストテレスの考えも参考になると思っている。彼は，人間が幸福になるためには，優れた魂「徳」を持つことであると述べ，「徳」について，知性的徳，(知恵<理論知>思慮<実践知>)，倫理的徳<勇気，節制>を唱えている。中でも子供たちにまずは，ある程度，物事の善悪や守るべき決まり等をしっかり教えること，これは，基礎的理論知になると思う。アメリカの教育者トーマス・リコーナは，「基本的な道德的価値は，しっかり教えなければならない。」と述べている。私は，道德の時間の中でも彼の述べているように「道德的価値の定着化」を図るよう努力すべきだと思っている。私は，戦前の修身には「基本的な道德的価値の定着化」に効果があった部分があったと思っている。修身がすべて問題あるように論じられていることに違和感がある。修身の教科書には，人間として守るべきことや義理，人情，社会の貢献等，かなり具体例

を挙げながら述べられているところもある。また、教師の説話もうまかったようである。大正14年生まれ之母が、生前よく、私に修身で学んだことから話していたのを覚えている。そのことが、私の生活の中でよりよく生かされているところもある。

道徳の授業では、時には、人間としてやってはいけないこと、学校、社会生活のルールを守るべきことなどを何回も手を変え、品を変え教えていくことも必要である。それが教師の「説話」でもよい。説話は、長くなくてもいいのである。導入時やまとめの段階でも、また、展開途中でもいいと思う。このような基本的な道徳的価値とともに、「デュウイ」の三つの人格の構成要素から成り立つという理論も参考としたい。以下、次のような要素となる。

「第一要素は、情緒的感動性である客観的に存在している問題を、主観的にも意識できる能力のことである。客観的に存在している矛盾に、主観的にも気づく能力である。くだいていえば、不満を不満と感じる能力。第二の要素は、社会的知性は、その問題がどうして起こったのか。どうしたら解決できるのか。解決の仕方を理解する能力。第三の要素は、社会的実践能力、問題の本質を認識し、その認識に見合った実践行動が組み、社会的知性の指示する問題解決の仕方に基づいて、実際に問題解決できる実践能力」。

道徳の授業を通して「子供たちに問題解決能力」を育成することは大切で、これが「生きる力」にもなる。そして、それは、道徳科の目標の到達努力につながるものであると考えている。

4 考え、議論する道徳について

(1) 考え、議論することについて

*議論とは、(広辞苑)互いに自分の説を述べ合い論じること。意見を戦わせること。などとなっている。

このことは、道徳の授業の中で時には、登場人物の言動等、社会生活の中の出来事等について、「自分は、このように思う」「私は、主人公の言動に怒りを覚える」「私は、Aさんの述べたことに対して、反対的な立場である」等々——。話し合いが白熱化していかなければならない。毎時間の道徳の授業で行うことは難しいであろうが、教師は、議論する道徳の授業を行っていくという心構えで教材等様々に準備していく必要がある。このことを少しずつ繰り返すことによって、議論する道徳の回数も増えていくであろう。議論するようになるには、当然、子供たちが使われた教材について、真剣に課題を把握して、なぜか？ どうしてか？ 考える場面がなければ議論までにはいかないであろう。考えるにあたって子供たちは、社会生活や自分の生活体験なども思いめぐらしながら考えていく必要がある。考え、議論する道徳には、担任が道徳の授業を行う上からも、日々の学級経営の中で、学習作法の育成が大切である。

A 道徳の授業を高めていくには、学級経営の充実が基盤となっている。この点が道徳の授業に担任があたることの由縁であろう。日々の学級経営の中で子供たち一人一人の特質を把握するとともに、発言をしっかりとできる「学習作法」を育成していく

必要がある。特に人の話を最後まで聞く。発言をした子供の内容がおかしなくても決して馬鹿にしない。指名されたら、誰かと同じ内容でも自分なりにきちんと発表（説明）する等々の学習作法を日々の学級経営の中で培わせていく必要がある。

B 教師は、授業に使う資料をよく吟味し、本時の主題に子供たちが興味関心をもって取り組む資料かどうかをしっかりと把握する必要がある。

教師が、教科書や心のノート等を事前に熟読しないで、場当たりに授業をやるようでは、子供たちの意欲を高める授業にはならない。すなわち、教材研究の充実が不可欠である。これは、他の教科でも同じであるが、道徳の場合は、教師自身が本時に使う資料を熟読して「気に入る」「感銘する」資料を使っていく必要がある。

学習指導要領解説〈特別な教科道徳編〉にも「多様な教材の開発」が述べられ、資料の重要性を示している。

子供たちの発言を高める資料は、自己の実践では次のようなものとなった。

- (イ) 資料の中に登場する人物が複数あり、主人公の行動や考え方に対立する人物がある資料（主人公への弁護や批判に分かれやすい資料）
- (ロ) (イ)の内容を含んでいて子供たちがよく学校や家庭、地域社会等で体験したりしている資料



逆にあまり発言がえられなかった資料では――

- (イ) 主人公の行動や考え方に対してあきらかに弁護や批判に片寄ってしまうような資料
- (ロ) 資料に描かれている主人公なり、筆者なりの生き方が子供たちの生活経験とかけ離れているような資料（異質性の資料）

道徳の授業で使う資料は、文章、視覚（映像）演技等様々である。

自動車の運転免許証の更新の時に「シートベルト」をしないで事故にあった時の怖さを視覚（映像）で知るが、このような資料を道徳でも使った場合は、大人子供とも「シートベルト」を付けなければと実践行為に入る人が多くなる。資料の中には必ずしも児童生徒が、意見を対立的に話し合う方法だけでなく、感想を述べたり、記述したりすることもあってしかるべきである。

また、資料の活用の難しさもある。埼玉県で東北大地震の際に「津波警報を自分の生命をかけてマイクで避難を呼びかけた若き女性の死」を資料にしたものが話題となった。その時に私は、学校相談担当として県の教育委員会で住民の電話相談等を担当していた。ある男性から「この資料は、内容としては感銘するが、子供たちにどのように指導していくのか？人の命を救うことは良いが、そのために娘さんは亡くなってしまった。資料を使って子供たちに命を捨てて人のためになれと教えるのか？」こんなような問い合わせがあった。

もちろん生命まで捨てて人を救えなどの指導はありえないが、その場では自分自身資料の内容も把握していなかったので、他課に回して対応してもらった。

確かに問い合わせの男性の意図もわかる。亡くなった娘さんの行為は、本当に素晴らしいことなのであるが、それをどのように子供たちに教えていくのかも様々なとらえ方がある。資料によっては教師同士で話し合っって指導内容を確立していくが必要である。

また、資料を活用する場合に活用する資料の主題名や徳目（価値項目）を何にしていくかが大切である。資料の読み取りをしっかりと行わないと適切なものとならない。例えば中学生1年生の授業でよく使われていた「吾一と清三」は、朝の登校時、友達の一人がなかなか集合時刻に来ない、それを待つ清三と学校に遅れてまで待つ必要がないと考え、仲間を置いて登校した吾一。しかし、吾一は、遅刻して廊下に立たされる清三を見ると吾一の心は「草の葉のように揺れている。」このような内容に対して「規則」「友情」では、授業の流れも変わってくる。大学の授業では、学生たちに、資料の読み取りと資料分析等を通してしながら主題名や価値項目等の選択をグループで話し合わせた。

道徳の授業について、A市 B市内の中学校と小学校から教師に対してアンケートを実施した。（平成28年1月下旬から12月上旬実施）（*一部を記す）

「道徳の授業は、教科の授業と比べてどうか？」について

A 行いやすい

小学校 24名中（2校）11名（46%）

中学校 42名中（3校）13名（31%）無回答1名

B やりにくい

小学校 24名中（2校）13名（54%）

中学校 42名中（3校）28名（67%）

中学校は、教科制のためかやりにくいと感じてる方が小学校より多い。なお、1校の小学校は2年間道徳の研究を行っているためか、「やりやすい」と回答した方が多かった。

5 道徳科の評価について

平成30年、31年度から小学校、中学校道徳の授業について評価を行い、子供たちに伝えるなければならない。数値ではないが道徳の評価は今後の研究課題である。

「児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすように努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。」

- ・数値による評価ではなく、記述式であること。
- ・他の児童生徒との比較による相対評価でなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、励ます個人内評価として行う。
- ・他の児童生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する必要がある。
- ・個々の内容項目ごとの評価でなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行う。
- ・発達障害等の児童生徒について配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。

以上（学習指導要領解説＜特別な教科道徳編＞より）

私は、各教師が学校内で統一していくつかの評価項目を作って、日々の授業で把握しておくものと、道徳の授業後の子供たちの変容を見ていく評価等を作成しておく必要があるのではないかと考える。評価をつける時期になって、いきなり文章表記していくのでは適切な評価にならない。

道徳の授業での評価（一例）＊適宜評価していく＜記録用＞

発言、発表について意欲的	発言、発表の内容に考えが深い ＊どのような	個性のある発言、発表 ＊どんなときに	書くことからみて、考えが深い ＊どのような	人の話がよく聞ける ＊どんなときに
グループ学習での取り組み ・仲間に配慮がある ・リーダー的 ・協力性がある等	その他 友情、思いやり（やさしさ）、協調性、勇気、公共心、正義感（公正）、家族愛、愛国心、郷土愛等々も踏まえながら評価の記録をしていくことも必要であろう。			

（上記の一例をもとに、評価をする場合は、大きくくりなまとまりにして評価する。）

＊道徳科になることよっての先生方の考えを以下の内容で答えてもらった。

（複数選択可）

- ア 道徳科になることよって、授業がしっかりやれてよいことである。
- イ 道徳科になることよって、教科書重視になりそうで、いままでのようなやり方の自由さがなくなりそうで、心配である。
- ウ 道徳科の設置よって、評価が難しいし、点数化でないので評価もあまり意味がないのではないだろうか？
- エ 道徳科の設置よって道徳の授業に教師、保護者、地域社会等にも関心高まり道徳教育の高揚のためにも良いことである。
- オ その他
小中学校（5校）66名中
ア（19名＜29%＞ イ（20名＜30%＞ ウ（38名＜58%＞
エ（16名＜24%＞ オ その他9名＜14%＞

道徳科の設置については、道徳の授業がしっかりやれてよいという意見もある反面、教科書の導入によって、授業における教師の自由性が狭まってしまうという心配そして評価が大変になるという懸念が多く聞かれた。

大正期に修身の教科書使用問題で話題になった松本女子師範学校附属小学校の「川井訓導事件」のようなことになっては困ると思う。教科書も使用するが、他の教材も使って授業を行うこともできる。道徳科に意欲的に取り組む教師の指導に創意工夫が十分にできる体制が必要である。

6 おわりに

本論は、紙面の関係で主として道徳の時間（授業）をいかに子供たち、教師が楽しく、有意義に過ごすことができるかを根本に据えてまとめてみた。中でも「考え、議論する道徳」、「評価の在り方」についてアンケートなどの調査を参考として、私なりにいままでの授業実践を踏まえながらまとめた。ただし、評価については、もう少し、ページ数があれば自分なりにこんな評価もしていいのかな？という評価の疑問点を具体的に述べたかったのであるが、今回は、省くことにした。ただ、疑問点は、学習指導要領（特別の教科 道徳編）P112に記されている「生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要がある。」のところで「道徳性の成長の様子」を道徳の授業を通す中で評価していく実践例が少ないようにおもうことである。多くが生徒の学習状況の成長の評価になっているようである。それは、調査官、指導主事たちが「道徳性の評価は、内面的なので個々に違い評価しにくいし、評価しなくてもいい。道徳の授業ではできない。難しい。」と教師たちにしてもどうしていくか迷うことも多いであろう。また、道徳科の設置においては、いじめの問題や生命の尊重なども関係している。今回の道徳科の設置によって、以前よりもいじめに対して、子供たちがより、関心をもち、道徳の授業を通す中でもいじめを許さない意識の高揚や人に対する「思いやり」の言動等が授業の中でも育成されていくべきであろう。これは、生命の尊重でも同じことだ。

そのような面の「道徳性の成長の様子の把握」がされ、評価できていくことも必要ではないだろうか。

参考文献

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説〈特別の教科 道徳編〉（文部科学省）
道徳の時間の評価の在り方と工夫（奈良県立教育研究所発行）
道徳教育—日本放送教育協会出版 木原孝博著